不具者

藤田和範

四歳の頃に脳脊髄膜炎に罹り、重態となった私は、死線をさ迷ったと聞かされていた。その時、急を聞いて駆けつけてくれた医者が、引き付けている私を見るや、こう言ったそうである。

「おお、やっちょる、やっちょる。もう駄目ですな。もし助かっても、一生片輪で過ごすしかない」

その一言を聞いた母は、教会へ使いを走らせ、柘植不知人牧師においで願った。その時の母親の燃え立つ信仰と、柘植不知人牧師の切なる祈りとが聞き上げられて、一命が取り留められたそうである。

そのような目に合った私の幼少時代の日々は、暗い悲しみの連続だった。口がよく利けない。左半身不随のため手足が自由にならない。そのために、友達との交わりにも暗い陰がつきまとっていた。そのような時、涙ぐむ私を支えてくれたのは、日曜学校だった。ただ望みは祈りのみだった。

小学校四年生の秋、勉強のできなかった私は、放課後に二階の教室に残された。
「藤田お前は、日曜学校へ行ってるんだってな。そんなに神さんが偉いのか。そんなら、この二階の窓から飛び下りてみろよ。きっとお前の神さんが助けてくれるだろうからな」
その言葉を聞いた私は、一瞬目の前がぐらぐらとした。
「僕、何のために日曜学校に行ってるんだ」
目の前が真っ暗となったその日以来、私は一層落ち込み辛い日々を歩むこととなった。そうした私を支えてくれたのは、祈りだった。
一九三七年、十五歳になった私は、十月二十四日午後霊南坂教会の特別聖会に出席した。バックストン師の集会だった。千名を超す盛会だった。神の火が会場に下り、聖霊で満ち溢れた。生ける臨在によって私は目が開かれた。救い主イエスさまを身近に覚えると、新しくされた思いに満たされ、患難は喜びに変えられた。